



## 工藤篤子メールマガジン 150号(お正月号) 2009.01.02

2010年、あけましておめでとうございます！

昨年のハードスケジュールも、皆さんの熱いお祈りに支えられ、すべての奉仕を、主の恵みの中で終えることができました。ほんとうにありがとうございました！また、たくさんの励ましのメールやお便りをいただきましたのに、ほとんどお返事を書くことができませんでした。お詫びと共に、心からの感謝の気持ちをお伝えいたします。

コンサート後、札幌の実家で、父と妹と共に、幸いな年末年始を迎えることができました。久しぶりにくつろいだひとときを持たせていただいています。

### フェイス&ワシップ(賛美と礼拝)

昨年のコンサートでも、素晴らしい主のみ業を見せていただきました。その中でも、12月25日、今年最後の本郷台キリスト教会でのクリスマス・コンサートは、私にとって、忘れ得ぬコンサートとなりました。

その朝、ホテルで祈っていた時に、真っ白い衣を着て右手を高く掲げたイエス様の姿が、心の目にはっきり見えました。感動的な祈りの時でした。ところが、昼ごろから、私は、前日から服用していた鎮痛剤の副作用か、胃に穴が開いたのではないかと思うような痛みと吐き気に襲われたのです。午後のリハーサルを終えた後には、ついに立っていることさえままならない状態になりました。そのため、しばらく控室で横になりました。その間、朝読んだ、「わがこころの喜び」の12月25日に書かれたマザー・バジレアのことばを思いめぐらしていました。「今日のレースをしっかりと走り抜きなさい。・・・信仰の旗をかかげ、転んでもまた起き上がって走り続けなさい・・・」

本番30分前、勝利の君であるイエス様が私を立たせ、賛美させてくださるに違いないと、起き上がって、ドレスに着替え、コンサートに臨みました。ステージに立った途端、背後には、再び右手を掲げたイエス様を感じ、目の前には小羊の姿が見えるようでした。コンサートが始まるやいなや、私はもう、私たちの罪のためにほふられた小羊のみ前にひれ伏す思いで、心からの「プレイズ&ワーシップ」（賛美と礼拝）を捧げ始めていました。

コンサート後、多くの方々が「コンサートにして完全な礼拝であった」と言い、ティーンエイジャーの若者も「心から神を礼拝することができた、最高の時だった」と、言って来られたのです。そして、ノンクリスチャンのある方々は、「確かにキリストがおられるのが分かった」と言って帰られました。

「神だけがあがめられること」、これこそ、私の賛美コンサートの最大の目的です。神があがめられるとき、主がご自身のご栄光を表され、人がその栄光に触れるとき、確かに救いへと導かれて行くからです。本郷台キ

リスト教会のコンサートでは、主は私の肉体と心を弱くし、ご自身のみ力とご栄光を表してくださいました。そのあふれる恵みに、また絶大な主のご臨在に触れ、私自身が圧倒されるようなひとときを過ごさせていただきました。今年も、主に私の心の固い肉を砕いていただきながら、心からの賛美・礼拝（プレイズ&ワーシップ）を捧げる者とさせていただきたいと、心から願っています。

(写真は12月23日の「びわこクリスマス」、安土町、文芸セミナーヨにて)



## 伴奏者の皆さん

昨年秋、心を合わせて共に賛美を捧げてくださった、コンサートの一番の同労者である伴奏者の皆さんを紹介させていただきます。



写真右から、オルガニストの矢吹綾子さん、ピアニストの金井ゆりさんとフルーティストの紫園香さん、ピアニストの佐伯尚子さん、李家和馬さん、石川美佐子さん、野田常喜さんです。

日本では、伴奏者と呼ばれることを好まれない方もいらっしゃるとお聞きしましたが、私は、「伴奏者」という名称がとても好きです。伴侶・同伴者として、愛と思いやりをもってソリストを支え、引き立て、一体となって演奏してくれる人だからです。中には日本を代表するアーティストもいらっしゃいましたが、福音宣教に燃え、共に神に仕えるしもべとして、素晴らしい賛美を捧げてくださいました。そして、皆さん、多くの時間を、練習、アレンジ、聴音、楽譜作成、音合わせに費やしてくださいました。主が、このような素晴らしい伴奏者と巡り合わせてくださったことを、心から感謝しています。

---

これから、一度大阪に戻り、7日にドイツへ帰ります。ドイツでは、今春4月から始まる日本、台湾でのコンサート・ツアーまで、静思の時を持たせていただく予定です。どうぞ、主の愛の深みに漕ぎ出す素晴らしい主との交わりの時となりますよう、お祈りください。

では、次回は、ドイツからメルマガを送らせていただきます。

皆さまにとって、2010年が、主の恵みと祝福にあふれる一年でありますように！

工藤篤子